



星野青年、目覚める

小林 宣之

『海辺のカフカ』は田村カフカ少年をめぐる奇数章とナカタ老人をめぐる偶数章からなる。少年の時、一切の知的活動能力を奪われ永遠の幼児のまま老境に入ったナカタさんは、運命に導かれて四国を目指す。老人を高松まで送り届ける羽目になった、働き者ではあるが特に人生について深く思いをめぐらすわけでもなく、漫然と生きてきたトラック運転手の若者は、行動を共にするうち次第にナカタさんに深く感化され、この老人と出会った偶然を必然と理解し、そこに自身の再生の契機を認めるに至る。その過程に、音楽と映画にまつわる芸術経験が深く関与する。ここでは、小説の記述に沿って、指示された作品に実際に接してみよう。

一・星野青年、登場

星野青年が『海辺のカフカ』に登場するのは上巻の第二十章においてである。星野青年はまずこのよう

に登場する。

その少しあとで、ナカタさんは神戸まで乗せていってくれるというトラック運転手を見つけ、中目ドラきた。眠そうな目をした二十代半ばの男だった。髪をポニーテールにして、耳にピアスをつけ、中日ドラゴンズの野球帽をかぶり、一人で煙草たばこを吸いながら漫画週刊誌を読んでいた。派手な模様のアロハシャツを着て、ナイキの大振りなシューズを履いていた。背はあまり高くない。煙草の灰を、迷うことなく食べ残したラーメンの汁の中に落とした。彼はナカタさんの顔をまじまじと眺め、それから面倒くさそうにうなずいた。「いいよ、乗っかっていきな。あんたうちのじいちゃんに似てるよ。かつこうとか、話し方のずれ加減とかさ……。最後はすっかりほげちまって、しばらく前に死んだけどな」

（新潮文庫版上巻、p.409～410）

「おれは岐阜の山の中で育ったからな、〔…〕」

（同、p.411）

二、星野青年、ベーターヴェンに出会う

ナカタさんに四国の高松まで同行した、人はいいが軽薄なトラック運転手の星野青年は、いつの間にかこの不思議な老人に深く惹かれると同時に、下巻第三十四章において、人生の意味を内省する思索的な若者に変貌し始める。

あたりはもうすっかり暗くなっていた。彼は急にコーヒーが飲みたくなった。そう思っただけを見まわすと、商店街から少し引つ込んだところに喫茶店の看板が見えた。近頃ではあまり見かけなくなった種類の、古風な喫茶店だった。彼は中に入り、ゆったりとした柔らかい椅子いすに腰をおろし、コーヒーを注文した。しっかりとしたウォルナット材のボックスに入った英国製のスピーカーからは室内樂が流れていた。ほかに客は一人もいなかった。その椅子に身を沈め、青年は久しぶりにほっとした気持ちになることができた。そこにある何もかもが穏やかで、自然で、身体に心地よく馴染なじんでいた。運ばれてきたコーヒーはとても上品なカップに入って、濃くてうまかった。彼は眼を閉じ、静かに息をしながら、弦とピアノの歴史的な絡みから合いに耳を澄ませた。クラシック音楽を聴いたことはほとんどなかったが、その音楽は何故なぜか心を落ちつかせてくれた。内省的にした、と言ってもいいかもしれない。

青年はその柔らかい椅子の中で、目を閉じて音楽を聴きながら、いろんなことを考えた。おもに自分と

いうものの存在について考えた。でも考えれば考えるほど、そこには実体がないみたいに思えてきた。そこにあるのはただの意味のない付属物でしかないという気がしてきた。

〔…〕

青年はコーヒーのおかわりを注文した。

「当店のコーヒーはお気に召しましたか？」と白髪の店主がやってきて尋ねた（もちろん青年が知るわけはないのだが、彼は元は文部省の役人だった。退官後故郷の高松市に帰り、クラシック音楽を流してうまいコーヒーを出す喫茶店を始めた）。

「ああ、とてもうまくいったよ。実に香りがいいね」

「豆を自分で煎いっているんです。一粒一粒手で選り分けます」

「道理でうまいんだ」

「音楽はお耳ざわりではありませんか？」

「音楽？」と星野さんは言った。「ああ、とてもいい音楽だ。耳ざわりなんかじゃないよ、ぜんぜん。誰が演奏しているの？」

「ルービンシュタインⅡハイフェツⅡフォイアマンのトリオです。当時は『百万ドル・トリオ』と呼ばれました。まさに名人芸です。一九四一年という古い録音ですが、輝あきが褪あせません」

「そういう感じはするよ。良いものは古びない」

「中にはもう少し構築的で古典的で剛直な『大公トリオ』を好む方もおられます。たとえばオイストラフ・トリオとか」

「いや、俺はこれでいいと思う」と青年は言った。「なんとというか——優しい感じがする」

「ありがとうございます」と店主は「百万ドル・トリオ」に成り代わって丁寧^レに礼を言った。店主が引つ込むと、星野青年は二杯目のコーヒーを味わいながら、省察の続きにとりかかった。

[…]

彼は『大公トリオ』を聴き終わるまでに、それだけのことを考えた。その音楽が彼の思索を助けてくれた。

「よう、おじさん」と彼は店を出るときに店主に声をかけた。「これはなんていう音楽だっけね？さつき聞いたけど忘れちゃったよ」

「ベートーヴェンの『大公トリオ』です」

「太鼓トリオ？」

「いいえ、太鼓トリオではなく、大公トリオです。この曲はベートーヴェンによってオーストリアのドルフ大公に捧げられました。それで、正式につけられた名前というのではないのですが、俗に『大公ト

リオ』という名で呼ばれております。ルドルフ大公は皇帝レオポルト二世の息子で、要するに皇族です。音楽的資質に恵まれ、十六歳の時からベートーヴェンの弟子になり、ピアノと音楽理論を学びました。そしてベートーヴェンを深く尊敬することになりました。ルドルフ大公はピアニストとしても作曲家としてもとくに大成はしませんでした。現実的な局面では世渡りの下手なベートーヴェンに援助の手をさしなべ、陰に日向ひなたに作曲家を助けました。もし彼がいなかったらベートーヴェンはいつその苦難の道歩んでいたことでしょう」

「世の中にはそういう人もやはり必要なんだな」

「そのとおりです」

「みんなが偉人、天才だと、世の中は困ったことになっちまう。誰かがあちこちに目配りをして、いろんな現実的な始末をしなくちゃならない」

「まったくおっしゃるとおりです。みんなが偉人、天才だと、世の中は困ったことになります」

「なかなかいい曲だね」

「素晴らしい曲です。聴き飽きるということがありません。ベートーヴェンの書いたピアノ・トリオの中ではもつとも偉大な、気品のある作品です。ベートーヴェンは四十歳のときにこの作品を書きあげ、これを最後にピアノ・トリオには二度と手をつけませんでした。彼はおそらくこの作品によって、自分はこ

の様式の頂点をきわめたと感じたのでしよう」

「わかるような気はする。何ごとによらず頂点つてのは必要なんだ」と星野青年は言った。

「またお越しく下さい」

「うん、また来るよ」

(新潮文庫版下巻、p.208～214)

三．星野青年、フランソワ・トリュフォーに出会う

クラシック喫茶を訪れた翌日、旅館で眠り続けるナカタさんに暇を持て余した星野青年は、これまで見たこともないタイプの映画に興味を引かれる。音楽のみならず、映画もまた、星野青年の内省の契機となる。

駅で新聞を買い、ベンチに座って映画広告欄を調べた。駅の近くの映画館でフランソワ・トリュフォーの回顧上映をやっていた。フランソワ・トリュフォーがどういう人なのかまったく知らなかったが(だいたい男か女かもわからない)、二本立てだったし、夕方までの時間が潰せそうなので、見に行くことにした。上映されていたのは『大人は判^{わか}つてくれない』と『ピアニストを撃て』だった。観客は数えるほどしかない

なかった。星野さんは熱心な映画愛好家とはとても言えなかった。たまには映画館に足を運んだが、見るのはカンフー映画とアクション映画に限られていた。だからフランソワ・トリュフォーの初期の作品にはいささか理解しにくい部分や局面が多々あったし、古い映画だからテンポもずいぶんのろかった。しかしそれでもその独特の雰囲気や、画面のトーンや、暗示的な心理描写を楽しむことができた。少なくとも退屈して時間を持て余すようなことはなかった。見終わったとき、この監督の作ったべつの作品を見てもいいと思っただけだった。

(同、p.215～216)

四・星野青年、ハイドンに会う

映画を見終わった星野青年は再びクラシック喫茶を訪れる。ハイドンもまた、ベートーヴェン同様に、彼の心を深く捉える。

映画館を出たあと、商店街まで歩き、昨夜と同じ喫茶店に行った。店主は彼の顔を覚えていた。青年は同じ椅子に座ってコーヒートを注文した。やはりほかに客はいなかった。スピーカーからはチェロ協奏曲が流れていた。

「ハイドンの協奏曲、一番。ピエール・フルニエのチェロです」、コーヒーを運んできたときに店主は言った。

「すごく自然な音がするね」と星野青年は言った。

「ほんとうにそのとおりです」と店主も同意した。「ピエール・フルニエは私のもっとも敬愛する音楽家の一人です。上品なワインと同じです。香りがあり、実体があり、血を温め、心臓を静かに励ましてくれます。私はいつも『フルニエ先生』と呼んでおります。もちろん個人的な親交があつたわけではありませんが、私の人生の師匠のような存在になっています」

フルニエの流麗で気品のあるチェロに耳を傾けながら、青年は子どもの頃のことを思い出した。毎日近所の河に行って魚や泥鰌どじょうを釣っていた頃のことを。あの頃は何も考えなくてよかった、と彼は思った。ただそのまんま生きていればよかったんだ。生きている限り、俺はなにものかだった。自然にそうなたんだ。でもいつのまにかそうではなくなってしまった。生きることによって、俺はなにものでもなくなってしまった。そいつは変な話だよな。人つてのは生きるために生まれてくるんじゃないか。そうだろう？ それなのに、生きれば生きるほど俺は中身を失っていった、ただの空っぽな人間になっていったみたいだ。そしてこの先さらに生きれば生きるほど、俺はますます空っぽで無価値な人間になっていくのかもしれない。そいつは間違つたことだ。そんな変な話はない。その流れをどこかで変えることはできるのだろうか？

「よう、おじさん」と青年はレジのところにいる店主に声をかけた。

「なんでしよう?」

「もし暇があったら、迷惑じゃなかったら、ここに来てちよつと話さないか。この曲を作ったハイドンというひとについて少し知りたい」

店主はやってきて、ハイドンの人間と音楽について熱心に語った。「…」

「…」多くの人はバッハやモーツァルトに比べてハイドンを軽く見ます。その音楽においても、その生き方においても。たしかに彼はその長い人生をとおして適度に革新的ではありましたが、決して前衛的ではありませんでした。しかし心をこめて注意深く聞き込めば、近代的自我への秘められた憧憬どぎけいをそこに見ることができはるはずでず。それは矛盾を含んだ遠いこだまとして、ハイドンの音楽の中に黙々と脈打っているのです。たとえばこの和音をお聞きください。ほらね、静かではありますが、少年のような柔軟な好奇心に満ちた、そして求心的かつ執拗しつぱうな精神がそこはあります」

「フランソワ・トリュフォーの映画みたいに」

「そのとおりです」と店主は言つて、思わず星野青年の肩を叩たたいた。「実にそのとおりです。それはフランソワ・トリュフォーの作品にも通底するものです。柔軟な好奇心に満ちた、求心的かつ執拗な精神」

ハイドンのトリオが終わると、青年はもう一度ルービンシュタインⅡハイフェツⅡフォイアマンのトリ

オの演奏する『大公トリオ』を聴かせてもらった。そしてその音楽に耳を傾けながら一人で再び長い省察にふけた。

「俺はとにかくいけるところまでナカタさんについていこう。仕事なんて知ったことか」と星野さんは心をきめた。

（同、p.216～219）

五、星野青年、目覚める

星野青年は、超越的な促しによって西に向かうナカタさんを四国の高松まで送り届ける案内人として偶然に選ばれた平凡なトラック運転手に過ぎない。知性とか教養とか、そういったものに無縁なまま、彼なりに職務に忠実なお人好しの青年だった。その愛すべき星野くんの中に、ナカタさんとの出会いと同行を通じて、それまで無自覚なまま彼の中に眠っていた何かが目覚める。高松で無聊ぶりようをかこつ星野青年は、偶然目についた古風な喫茶店に入る。店内の落ち着いた雰囲気と控えめな店主、うまいコーヒ―は星野くんをくつろがせる。店内に流れるクラシック音楽に耳を傾けるうち、いつの間にか彼は来し方行く末について思いを巡らせていた。それは青年にとって初めての経験である。この経験のきっかけになったのが、聞くともなく聴き入っていた音楽の力だった。店主は、その音楽が、『大公トリオ』のあだ名をもつベート

ーヴェンのピアノ三重奏曲であること、またそのあだ名の由来となったエピソードを青年に語る。このエピソードは星野青年に啓示の役割を果たす。「現実的な局面では世渡りの下手なベートーヴェン」がナカタ老人であり、「援助の手をさしのべ、陰に日向ひなたに作曲家を助け」るルドルフ大公が自分であるような気がする。ナカタさんは、何だかわからないけれども、あの偉大な作曲家のように重大な責務を遂行しようとして難渋なだじゅうしている。ナカタさんもまた、「援助の手をさしのべ、陰に日向に助け」てくれ、「あちこちに目配りをして、いろんな現実的な始末をし」てくれる「誰か」を必要としている。よし来た、ここはこのホシノちゃんが一肌脱いでやろうじゃないか、と彼は決意する。

この決意は、翌日、これまで見たこともない何の興味もなかった種類の映画への関心として持続する。フランスのヌーヴェル・ヴァーグの旗手の一人、フランソワ・トリュフォー初期の映画もまた、『大公トリオ』と同様の作用を青年に及ぼす。映画館を出て昨日の喫茶店に入った星野青年は、その時店内に流れていたハイドンのチェロ協奏曲にも敏感に反応する。これまで無縁だったいわゆる「芸術」、以前の彼なら鼻もちならない嫌味な存在と感じたかもしれない音楽や映画が、今は自分の決心を励まし、何かかわらないけれど、自分には意味深く感じられる方向へと彼を導く貴重なものと感じられる。

この一連の、星野青年の覚醒の過程の描写は心温まる。村上春樹は描写を形作る重要な要素として小物にも周到的配慮を怠らない。『大公トリオ』はルービンシュタインⅡハイフェッツⅡフォイアマンの「百万

ドル・トリオ」の演奏であらねばならないし、トリュフォーの映画は「大人は判ってくれない」と「ピアニストを撃て」でなくてはならないし、ハイドンのチェロ協奏曲も、ピエール・フルニエの演奏で聴いてこそ十全な力を青年に及ぼすのである。ハイドンの音楽に感じられる「柔軟な好奇心に満ちた、求心的かつ執拗な精神」について、星野青年がごく自然に「フランソワ・トリュフォーの映画みたい」と口にし、「そのとおりです」と店主が答える件は感動的だ。

村上春樹の作品にはしばしば特定の楽曲が取り上げられ、それが作品の重要な一部を象徴する。これを踏まえて、村上作品で取り上げられる音楽作品を網羅した著作すら存在する（参考資料批評の部の⑥）。ここではそのささやかな一例として、『海辺のカフカ』にさりげなく登場し、やがて重要な役割を担うことになる青年に覚醒を促す二つの楽曲を取り上げ、その関連要素としての映画にも言及してみた。

参考資料

I 文献資料

一．村上春樹の作品

①村上春樹・海辺のカフカ 上巻（新潮社・新潮文庫 二〇〇五〔平成十七〕）



年三月)

②村上春樹：海辺のカフカ 下巻（新潮社・新潮文庫 二〇〇五〔平成十七〕年三月）

③ Haruki Murakami, *Kafka on the Shore*, Vintage books, 2010.

④村上春樹：村上春樹編集長 少年カフカ（新潮社 二〇〇三年六月）

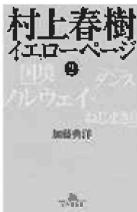
二、批評

①小森陽一：村上春樹論 『海辺のカフカ』を精読する（平凡社・平凡社新書 二〇〇六年五月）

②加藤典洋：村上春樹イエローページ1（幻冬舎・幻冬文庫 二〇〇六〔平成十八〕年八月）

③ジェイ・ルービン（畔柳和代訳）：ハルキ・ムラカミと言葉の音楽（新潮社 二〇〇六年九月）

④加藤典洋：村上春樹イエローページ2（幻冬舎・幻冬文庫 二〇〇六〔平成十八〕年十月）



⑤宮脇俊文…村上春樹ワンダーランド（いそつぷ社 二〇〇六年十一月）

⑥小西慶太…「村上春樹」を聴く。ムラカミワールドの旋律（阪急コミュニケ
ーションズ 二〇〇七年四月）

⑦内田樹…村上春樹にご用心（アルテスパブリッシング 二〇〇七年十月）

⑧石原千秋…謎とき 村上春樹（光文社・光文社新書 二〇〇七年十二月）

⑨加藤典洋…村上春樹イエローページ3（幻冬舎・幻冬文庫 二〇〇九〔平成
二十二年〕年十月）

〔特に、「第五章 心の闇の〈冥界〉めぐり——『海辺のカフカ』』（p.267～
376）参照〕

⑩土居豊…村上春樹を読むヒント（KKロングセラーズ 二〇〇九〔平成
二十二年〕年十二月）

⑪芳川泰久…村上春樹と村上春樹 精神分析する作家（ミネルヴァ書房
二〇一〇年四月）

〔特に、「第四章 隠喩構造——『海辺のカフカ』を読む』（p.155～191）

参照〕



三 関連文献

- ⑫ 栗原裕一郎・大谷能生・鈴木淳史・大和田俊之・藤井勉…村上春樹を音楽で読み解く（日本文芸社 二〇一〇年十月）
- ⑬ 小山鉄郎…村上春樹を読みつくす（講談社・講談社現代新書 二〇一〇年十月）
- ⑭ 内田樹…もういちど 村上春樹にご用心（アルテスパブリッシング 二〇一〇年十一月）
- ① E・B・スピリウス編（松木邦裕監訳）…メラニー・クライントウデイー精神病者の分析と投影同一化（岩崎学術出版社 一九九三年七月）
「エスター・ビックとピオンに関連して」
- ② E・B・スピリウス編（松木邦裕監訳）…メラニー・クライントウデイー2思案と人格病理（岩崎学術出版社 一九九三年八月）
「エスター・ビックとピオンに関連して」
- ③ ジークムント・フロイト（中山元編訳）…エロス論集（筑摩書房・ちくま学



芸文庫 一九九七年五月

④ ソフォクレス（藤澤令夫訳）…オイデイクス王 改版（岩波書店・岩波文庫
一九九九年五月）

⑤ E・B・スピリウス編（松木邦裕監訳・日下紀子ほか訳）…メラニー・クラ
イントウデイ3 臨床と技法（岩崎学術出版社 二〇〇〇年四月）

「エスター・ビツクとビオンに関連して」

⑥ 松木邦裕…対象関係論の基礎 クライニアン・クラシックス（新曜社

二〇〇三年九月）

「エスター・ビツクとビオンに関連して」

II 映像資料（DVD）

① 大森一樹監督…風の歌を聴け（一九八一年製作 一〇〇分 ジェネオンエン
タテイメント株式会社 GNBD-1077）

〔原作 村上春樹…風の歌を聴け（講談社・講談社文庫 二〇〇四年九月）〕

② 山川直人監督…100%の女の子／パン屋襲撃（一九八三年／一九八二年製



作 十一分／十六分 有限会社シネマンブレイン JYDD-1064)

『原作 村上春樹：四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて(『カンガルー日和』)』(講談社・講談社文庫 一九八六年

十月) 所収)

③市川準監督：トニー滝谷(二〇〇四年製作 ジェネオンエンタテインメント
株式会社 GNBD-1051)

『原作 村上春樹：トニー滝谷(『レキシントンの幽霊』)』(文藝春秋・文春
文庫 一九九九年十月) 所収)

④フランソワ・トリュフォー DVD-BOX 「14の恋の物語」I 四枚組
(Dreamworks DABA0612)

「大人は判ってくれない」収録)

⑤フランソワ・トリュフォー DVD-BOX 「14の恋の物語」II 四枚組
(Dreamworks DABA0613)

「ピアニストを撃て」収録)



Ⅲ 聴覚資料

①アルトウール・ルービンシュタイン(ピアノ)／ヤツシヤ・ハイフェッツ(ヴァイオリン)／エマヌエル・フォイアマン(チェロ)‥ベートーヴェン：大公トリオ／シューベルト：ピアノ三重奏曲第一番 (BMG JAPAN BVCC-37650)

〔上記「文献資料 一：批評」の⑨ (p.283) と⑫ (p.76) 参照〕

②オイストラフ・トリオ(ダヴィッド・オイストラフ「ヴァイオリン」／スヴァトスラフ・クヌシエヴィツキー「チェロ」／レフ・オポーリン「ピアノ」)‥ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第七番《大公トリオ》／シューベルト：ピアノ三重奏曲第一番 (EMI ミュージックジャパン TOCE-91092)

〔上記「文献資料 一：批評」の⑨ (p.283) 参照〕

③ピエール・フルニエ(チェロ)／ルドルフ・バウムガルトナー指揮ルツェルン音楽祭弦楽合奏団：ハイドン：チェロ協奏曲第一番(パノラマ・ハイドン作品集 オムニバス 二枚組「ユニバーサルミュージック

